

編 集 後 記

桜の開花とともに新年度が始まりました。春の人事異動で新メンバーを迎えたり、毎年この季節になると何となく職場が新鮮で活気溢れる雰囲気になります。

そして医療現場でも「働き方改革」が始まりました。医師の長時間勤務の解消と労働環境の改善を目指しますが、メディアによると多くの医療機関では「宿日直許可の取得」や「複数主治医制導入」などで対応し、また特定機能病院の多くは残業時間の上限を引き上げる特例を申請するなど、医療の質の維持や地域医療への影響などが懸念される中での開始となりそうです。

「誌上ギャラリー」は永田政幸先生から「春の太鼓橋」をご提供いただきました。満開の桜を戴く江戸時代にできた重厚な石橋の姿に風格を感じます。

「論説と話題」では3月に開催された「日本医師会医療情報システム協議会」での医療DXと地域医療情報連携ネットワーク、またオンライン診療・遠隔診療などの講演についてご報告いただきました。

「学術」の今村総合病院消化器外科、飯尾俊也先生の「結腸切除の術前に貧血を契機に発見された Peutz-Jeghers 型ポリープの1例」は、極めて稀な小腸孤発性 Peutz-Jeghers 型ポリープをカプセル内視鏡とダブルバルーン内視鏡検査で診断し得た症例で、原因不明の消化管出血（OGIB）におけるカプセル内視鏡とダブルバルーン内視鏡による小腸精査の有用性が示されています。

松下会あけぼのクリニック腎臓内科、田中元子先生の「腎性貧血への対応について～診断・治療・ガイドライン改定のポイント～」では、腎臓におけるエリスロポエチン産生障害による腎性貧血の発現機序、診断、治療と、心不全、腎不全、貧血が密接に関連する心腎貧血症候群などについて解説されています。

「医師会病院だより」は日高帯刀先生の麻酔科のご紹介です。コロナ禍で減少した手術

件数は回復傾向で、外科と婦人科手術のほとんどは内視鏡下手術となり、超音波ガイド下神経ブロックも増加傾向とのことです。2名の常勤医と応援医師が奮闘され、今後は麻酔科の需要増加が見込まれるそうです。

「随筆・その他」の栗博志先生の「音楽の散歩道（その8）—指揮者のお仕事—」では、2月に逝去された小澤征爾氏の活躍、そしてドイツ・オーストリアの指揮者や20世紀の指揮者の活動などが紹介され、今号でも豊富な美しい図や写真が大判・カラーになった医報の紙面に彩りを添えています。

小田原良治先生の「制度創設時に立ち返り医療事故の定義を再確認しよう（6）—『予期』と『予見』を混同してはならない—」では、医療事故調査制度の「予期しなかった死亡」の「予期」を、過失責任追及の「医療過誤」に付随する概念である「予見」と混同しないように注意が促されています。

鹿児島市立病院消化器内科、伊集院翔先生の「佐賀県の魅力」は大学時代から研修医まで過ごした佐賀県について、鹿児島とはまた違った豊富な海の幸や温泉地の数々、観光スポットなど佐賀県の魅力が存分に紹介されています。

「鹿市医郷壇」の兼題は季節にちなんだ「花見（はなん）」です。皆様のご投句をお待ちしています。

「働き方改革」の複数主治医制、勤務間インターバル、時間外労働規制など耳慣れない制度ですが、労働環境の改善は誠に結構なことです。かつて長時間勤務を美徳と錯覚し、夜間・休日を問わず容赦無くポケベルで呼び出されていた世代としては、今回の改革は医療現場におけるパラダイムシフトです。とは言え、術後トラブルなどには時間外であろうと迅速・適切な対応に赴く、執刀医としての責任感と矜持が「医療の質の維持」にはやはり必要なのではと思います。

（編集委員 森岡 康祐）